

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520189

研究課題名(和文) 幕末漢詩人杉浦誠著『梅潭詩鈔』の研究

研究課題名(英文) The Study of "Baitan Shishou - a collection of Baitan's poems" written by Makoto Sugiura, a Government Official of the Shogunate

研究代表者

市川 桃子 (Ichikawa, Momoko)

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：20212996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：杉浦誠著『梅潭詩鈔』活字本に収められている590余首及び『梅潭詩鈔』浄書本にある安政年間から明治7年までの主要作品の読解と分析を終了した。各作品について「本文、訓読、日本語訳、語釈」を記している。必要に応じて作品内容の解説を加え、作品の時代的な背景、伝記的な背景、登場人物の解説、参考資料等を記す。又これらの作品と『杉浦梅潭目付日記・函館奉行日記』『学海日録』等の資料を照合し、論文とした。江戸幕府から明治政府への移行期を、幕臣がどのように乗り切ったのか、基礎的研究資料としても有用である。平成26年度研究成果公開促進費を得て『幕末漢詩人杉浦誠『梅潭詩鈔』の研究』(汲古書院)を出版する予定である。

研究成果の概要(英文)： Makoto Sugiura was a government official of the shogunate (Tokugawa government). After the Meiji Restoration, he moved to Meiji government. He left "Baitan Shishou(a collection of his poems)", expressed his feelings among that turbulent times. We translated about 600 poems into modern Japanese and put a commentary on each poem. We got research publishing promotion expenditure of 2014, are going to publish a book, "The Study of 'Baitan Shishou - a collection of Baitan's poems" written by Makoto Sugiura, a Government Official of the Shogunate", from Kyuuko Shoin next year.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：杉浦誠 梅潭 『梅潭詩鈔』 幕末漢詩人 明治漢詩 日本漢詩 江戸漢詩 幕末

1. 研究開始当初の背景

筆者は長い間、中国古典詩の研究を行ってきた。近年、日本漢詩の研究を始め、新井白石、管茶山の作品を研究し、日本漢詩の水準の高さを知った。江戸漢詩は日本の誇るべき文学成果であり、中国の唐詩や宋詩と同様に、世界に発信すべきジャンルであると考えた。これまでに培ってきた中国古典詩研究の能力を生かして、日本漢詩の研究に貢献することができる。

今回は幕末の漢詩を扱うこととした。杉浦誠(梅潭)は、官僚としては、幕府の最後の箱館奉行として五稜郭の奉行所を新政府に引渡した人である。漢詩人としては大沼枕山門下にあり、官学派の中心として活躍した。杉浦誠を取りあげたのは次の理由による。

第一に、作品が興味深く、当時の水準の高さを表しているが、本格的な研究はされていない。

第二に、幕末の詩人として作品と資料がまとまって残っている。杉浦誠に関わる膨大な資料が、戦争や震災を経て杉浦家に保存され、現在では国文学資料館、東京大学史料編纂所に収められる。

作品は自ら選択編年して浄書させた『梅潭詩鈔』(浄書本)に2370余首が収録されている(国文学研究資料館蔵)。これを底本とした『梅潭詩鈔』(明治35年出版)には590余首がある。

第三に、詩人であるばかりではなく、幕臣として幕末の動乱期を経験し、作品と当時の時勢との関係を考察する面白さがある。新選組の前身である浪士組と関わり、江戸幕府最後の函館奉行であり、『杉浦梅潭目付日記・箱館奉行日記』(杉浦梅潭著 杉浦梅潭日記刊行会1991年11月)は幕末を知る一級の史料である。これらのほかに、未整理の豊富な資料がある。

第四には、今回、杉浦氏直系の子孫の全面的な協力が得られることになった。杉浦誠は次女に養子を迎え、孫の杉浦倅一を得た。直系の血縁としては唯一の人物で、作品にもたびたび現れる。杉浦倅一の長子杉浦俊介は三女を得た。杉浦家を継いでいるのはその二女の杉浦朝である。杉浦朝のもとに保存されている資料を借り受けることができた。

第五に杉浦誠の豊富な交流関係が興味を引いた。勝海舟、依田学海、巖谷一六、森春濤、向山黄邨等、有名無名の当時の多くの人々と交流があった。

2. 研究の目的

江戸漢詩は中国古典詩に劣らぬ水準を持つ優れた文学ジャンルである。ことに江戸時代後半の作品は水準が高く、本格的な研究に値する。夥しい詩人がおり、いっそうの研究が必要とされる。

本研究は幕末の漢詩人として知られる杉浦誠の詩集『梅潭詩鈔』を中心に作品を考察する。さらに、江戸漢詩の意義を明らかにし、

すぐれた日本文化の一つとして国際的に紹介していく。

1)『梅潭詩鈔』(浄書本) 2370余首 データベース化

2)作品600余首の訓読と現代語訳、解説。

3)作品分析 作品と事績について、『杉浦梅潭目付日記・函館奉行日記』などの資料との対照分析をおこなう。日記と照合して考察する。

3. 研究の方法

1)『梅潭詩鈔』(浄書本)2370余首を業務委託によってデータベースにする。校正を行ってデータベースを完成させる。インターネットでの公開をめざす。

2)『梅潭詩鈔』活字本590首余の作品の訓読と現代語訳を行う。後世の人々が誰でも理解できる形にする。

3)作品分析 『梅潭詩鈔』の作品と『杉浦梅潭目付日記・箱館奉行日記』(杉浦梅潭著 杉浦梅潭日記刊行会1991年11月)などとの照合により、明治維新前後の幕臣の行動と心情を明らかにする。

4. 研究成果

『梅潭詩鈔』活字本に収められている590余首及び『梅潭詩鈔』浄書本にある安政年間から明治七年までの主要作品の読解と分析を終了した。各作品について「本文、訓読、日本語訳、語釈」を記している。また、必要に応じ、作品内容の解説を加え、作品の時代的な背景、伝記的な背景、登場人物の解説、参考資料等を記す。又これらの作品と『杉浦梅潭目付日記・函館奉行日記』『学海日録』等の資料を照合し、論文とした。江戸幕府から明治政府への移行期を、幕臣がどのように乗り切ったのか、基礎的研究資料としても有用である。

平成26年度研究成果公開促進費を得て『幕末漢詩人杉浦誠『梅潭詩鈔』の研究』(汲古書院)を27年2月に出版し、全成果を公開する予定である。公開予定の内容は、次のようなものである。

『梅潭詩鈔』には二種類の本がある。

その一は、手書きで清書されており、二千余首が収められ、作品は安政四年から明治三十三年まで、年代順に整理されている。これを本書では『梅潭詩鈔』稿本と呼ぶ。国文学研究資料館の所蔵である。

その二は、稿本から田邊新と岡崎壮が六〇一首の作品を選んで編集し、活字にして明治三十五年に刊行した。上下本の選集である。依田学海による「梅潭先生伝」が付されている。これを本書では『梅潭詩鈔』または『梅潭詩鈔』活字本と呼ぶ。国会図書館の近代デジタルライブラリーで見ることができる。

作品篇は、その中から百三十首を選び、訓読訳注を付けたもので、必要に応じて補説を付け、作品の解説をしている。また、

付録のDVDには、『梅潭詩鈔』活字本の六百一首全てが収録され、その全てに訓読訳注を、また必要に応じて補説を付けてある。

論考篇には、杉浦梅潭の豊富な資料と漢詩を結びつけた研究が収められている。杉浦梅潭研究の有利な点は、日記や備忘録の類の一字資料が非常に多く残されているところにある。その中から、『杉浦梅潭一函館奉行日記』(一九九一・小野正雄、稲垣敏子)、『杉浦梅潭一目付日記』(一九九一・小野正雄、稲垣敏)が翻刻され、杉浦梅潭日記刊行会によって出版されている。また杉浦誠「浪士一件」は新撰組に関する一次資料として利用されている。これらの公的な内容を持つ資料と、私的な心情を述べる本書を併せて利用すれば、今後、多様な研究が可能であろう。

付録のDVDには、『梅潭詩鈔』活字本の全文の訓読訳注と必要な箇所補説、『梅潭詩鈔』稿本全文の写真、『梅潭詩鈔』稿本と『梅潭詩鈔』活字本のワードファイル、検索ファイルを収める。論文の主要なものを次に挙げる。

「幕臣の明治維新」市川桃子

明治維新を迎えたとき、代々幕府に仕えてここが天下の全てだと思ってきた幕臣は、幕府が崩壊する音を聞いてどのように感じ、行動したのか。一人の幕臣の日記と漢詩をもとにして、その行動と思いを追求する。目付として幕府と朝廷の間で奮闘した時期の作品を中心に分析し、そこから江戸幕府の人々が明治維新をどのように迎え、破壊的な混乱を起こすことなく乗り切ったのか、その時代の様相を垣間見る試みである。

「漢詩からたどる箱館奉行時代の杉浦梅潭」三上 英司

梅潭は、幕末、明治初の激動期、二度にわたって函館で過ごしている。本稿では、当時の梅潭の心境を彼の漢詩から探る。同時期の事跡については、『箱館奉行日記』(杉浦梅潭日記刊行会 みずうみ書房 一九九一)「経年紀畧」(杉浦誠 国文学研究資料館蔵)「開拓使時代の日記」(杉浦誠 国文学研究資料館蔵)等によってかなり詳細に知ることができる。しかし残念ながら、それらの梅潭自身の手による文章は、公職にあった者の記録であるゆえに、彼自身の感懐がほぼ記されていない。本論では、日本という国そのものの根幹が大きく問われた時代の中で、漢詩人杉浦梅潭が何を思い、何を感じたのかを、函館で書かれた彼の作品を通して確認して行く。

「梅潭の人間関係 依田学海・松浦詮」山崎 藍

『梅潭詩鈔』には杉浦梅潭と交流があった人物の名が見受けられる。その中で数多く登場するのが漢学者・劇作家の依田学海と、肥前の国平戸藩主松浦詮である。依田学海は、天保四年(一八三三) 明治

四十二年(一九〇九)。幼名は幸造・信造。名は百川、号は学海・柳蔭。中小姓を経て、儒官・代官・江戸留守居役になった。維新後は、佐倉藩権大参事・新政府の集議院幹事・地方官会議書記官などを歴任、明治十八年(一八八五)以降は著述に専念しつつ、明治十九年(一八八六)には演劇改良会をおこし、運動の促進者として名を残した。また学海は、『学海日録』と『墨水別墅雜録』の二種類の日記を書いたことでも知られ、共に活字本が出版されている。松浦詮は天保十一年(一八四〇) 明治四十一年(一九〇八)。字は景武・義卿、通称は朝五郎・源三郎、別号は乾字・稽詢斎。第十二代であり最後となった平戸藩主であり、石州流家元として茶道にも造詣が深かった。維新後は、宮内省御用掛を経て、明治十七年(一八八四)伯爵、のち貴族院議員を務めた。松浦詮については、伝記『松浦詮伯伝』(松浦伯爵家編修所編、松浦伯爵家編修所、一九二七年)があり、彼の人物像や交流関係がうかがい知ることが出来る。依田学海と松浦詮に関しては多くの論著があるが、本稿では『学海日録』、『墨水別墅雜録』、『松浦詮伯伝』に登場する杉浦梅潭に関する記載に焦点を絞り、梅潭と依田学海・松浦詮との人間関係の一端を明らかにする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

市川桃子「幕臣の明治維新」単著 査読有

2014年3月

明海大学外国語学部論集

市川桃子「中国文学研究者による日本漢詩研究」単著(委嘱論文)

『中国 社会と文化』第28号

東大中国学会 2013年6月

市川桃子「柳宗元と日本漢詩」単著

『中国文史論叢』第8号

(岡山大学文学部中国文史研究会)

2012年3月(委嘱論文)

〔学会発表〕(計2件)

市川桃子「从词汇角度对诗歌表现的分析」

2011年9月(中国)李白学会

中国青海省西寧

市川桃子「日本汉诗语言 江戸时代的资料」

2010年7月(中国)社会語言学会

中国湖南省永州

〔図書〕(計1件)

『幕末漢詩人杉浦誠著『梅潭詩鈔』の研究』

汲古書院 2015年2月(予定)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川 桃子 (ICHIKAWA, Momoko)
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：20212996

(2) 研究分担者

三上 英司 (MIKAMI, Eiji)
山形大学・地域教育文化学部・教授
研究者番号：30219597

(2) 研究分担者

劉 勳寧 (LIU, Xunning)
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：90261750

(2) 研究分担者

高芝 麻子 (TAKASHIBA, Asako)
横浜国立大学・教育人間科学部・専任講師
研究者番号：80712744